

『少年院のかたち』

毛利甚八 著 現代人文社 1,785円(税込)

少年院の処遇の核心を,
そこに働く人たちの生き方を通じて描く

会員 相川 裕 (45期)



本書は、(1)自らが少年院の篤志面接委員として収容されている少年たちとの関わりなどから感じたことを綴ったエッセイ、(2)少年院の法務教官へのインタビュー集、(3)そしてベテラン法務教官らの、ある少年の規則違反事件への取組みを描いた小説の3部からなる。

第一部で語られる、作者の非行少年たちへのメッセージはく苦しみも弱さも暴力ではなく音楽や言葉で表現できるのであり、それによって相手に思いを伝えることができる>というものだ。作者の体験・試行錯誤に基づくこのメッセージは非行少年の実像を的確に捉えるために非常に有益だ。

が、この本は、それだけではない。

第二部は、少年院の処遇の核心を、そこに働く法務教官の生き方を通じて描き出すことに成功している。少年たちに愛情をもって接し、その可能性を見だし、その変化に感動し、祈るような思いを込めて送り出す…、その地道な営みが、多くの少年たちの立ち直り

を支えてきた。

さらに、第三部は小説という形で、ある少年の若い法務教官への暴力という規律違反行為をきっかけに起こる法務教官相互の真剣なやりとりと、それを背景に展開するその少年への処遇を描く。その中で、仕事に行き詰まりを感じていた中年危機の法務教官が新たな気づきを得て成長するさまや、若い法務教官が変化する様子を描いている。法務教官のみならず、対人援助職に就く者(弁護士も大半がそうであろう)にとって、ハッとさせられ、勇気づけられ、あるいはささやかな希望を与えられるのではないだろうか。(私は山本周五郎「赤ひげ診療譚」を思い起こした。)

もう一点、第一部・第二部は第三部との関係でいえば作者の取材ノートの的なものとみることもできよう。とするとこの本は、作者の取材や体験がどのように小説作品に反映されるのかという、小説の創作プロセスを少し見せてもらえるような本でもある。